
ベルゼバぶ ~ 侍女の兄 ~

壺中

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ベルゼバぶ ～侍女の兄～

【Nコード】

N5039V

【作者名】

壺中

【あらすじ】

ヒルダにはシスコンの兄がいた！！

最強種の兄が男鹿や他の奴らと適当に過ごしていくお話。

正直行き当たりばったりなのでヘタすると一カ月放置とかざらにあるかもしれませんが、楽しんでもらえると幸いです。

さらに文章能力皆無なのでハチャメチャかもしれません。

独自設定オリ主最強キャラ崩壊が苦手な方はご遠慮した方がよろし

いかもしれません

口調を変更しました8月10日

一話（前書き）

お見苦しいことがあるかもしれませんが、見ていただき誠にありがとうございます。

もっと文才がほしいです!!

ではごきげん

一話

森林あふれているある森の中しかしここは人間の住む世界とは大い
にかけ離れた世界

通称魔界稲光のほとばしる中圧倒的な力によって大魔王と呼ばれた
男が座っていた。

「俺、今日から人間滅ぼすわ」

唐突に語り出したその口調は大層軽く、暇つぶしに消し去ろうかな
程度にしか思っていないようだ。

「なんつーかさ、最近あいつら増えすぎじゃね？まあ〜40億人超
えたあたりから考えていたんだけどさ、流石に倍近くなると本格的
にうっとうしいし」

「ですが大魔王様、明日はマモン様との会談、明後日はバル様と
ゴモリー様、レヴィーアタン様との耐久1年麻雀が予定されてお
ります」

「マジで!!!？超多忙じゃねえか〜どうすつかな……おっ!!そう
だ!!おい!!ヒルダ!ちょっと俺の末子連れて人間どもを駆逐し
に行ってくれ!」

「はっ!!!しかしお兄様に連絡してもよろしいですか?」

「ああ〜アザキエルか〜別にいいが明日出発なんだから明日まで
には伝えておけよ」

「了解いたしました。それでは」

その発言とともに金髪の女性は一瞬で姿を消した。

「まったく、ヒルダは相も変わらずブラコンだな」

「よろしいではありませんか兄妹仲が良いのは素晴らしいことです。それに、兄のほうも重度のシスコンですし」

「はっははは、違うない！！あいつはヘタしたらついていくだろうな」

.....
.....
.....
.....

「失礼します」

この家は現在私のお兄様が使っておられるのですが現在は大魔王様の長女のマリアン様のもとでお世話をなさっているはずですよ。

マリアン様は大層綺麗なお顔立ちをなさっており、隔世遺伝のようですが、坊っちゃんや焰王様のような緑の髪色ではなく美しい銀髪でございます。お兄様からのご紹介で、一度お会いしたのですが、否定するところのないほどの素晴らしいお方でした。

マリアンヌ様とお兄様は幼馴染のような関係で、常日頃一緒に連れ添われています。

その時のマリアンヌ様とお兄様の姿を見ていると胸が締め付けられるような不思議な感触に襲われます。

この感情が何かは知っています。

私はお兄様に恋心を抱いているのでしよう、否定する余地などありません。

いつからと明確なものはありませんがふと気付くとお兄様を目で追っつてしまい、微笑まれると心の底から嬉しくなってしまう。

お兄様の家に来たのは、ここに転移で戻ってこられるからです。

あと、数時間で戻ってこられるようなのですが、待つことはやぶさかではありません。

ここはお兄様の匂いで満ち溢れています。

この匂いが鼻孔を通り抜けるたびに、ほにゃん？と呼ばれるものでしょうか？安らいでしまいます。

部屋を見ると丁寧に片付けられている空間にベッドが一つ置かれています。

抗いがたいものがあります、普段の日常生活で私の部屋の中に置かれているベッドとは一線を画すものがこの空間に存在しております。

抗う必要はないのでしようそのまま自らの体をお兄様の普段寝ていられるベッドに預けます。

空気中に漂うお兄様の匂いよりもさらに濃厚に私の全身を襲ってきます。

秘所から蜜がこぼれ出しそれを布越しに感じ、その蜜を掬いだすように触れる、すると歯止めが利かなくなり自慰行為に耽ってしまいました。

近くにお兄様を感じ私は達してしまいました。そのままお兄様を感じながら意識を飛ばしました。

.....

「アザキエル、あなたには本日をもって無期限の出勤停止を申しつけます」

アザキエルは呆然としておりますね。

しょうがないんです。あなたが近くにいるたび動悸が激しくなり、もどかしくなるのです。

この感情は大変危険です。なぜかはわかりませんが。

時折妙に部下がほほえましく見守っているのですが何なのでしょう？

一旦離す必要があります。正体は、わかりませんが離せばこの気持ちもなくなるでしょう。

「な、何ででしょうか？私が何か致しましたか？御無礼でもありませんか？」

「そうでは、ありません最近私はあなたを働かせすぎたように感じたので少し旅行に行ったり体を休めてはどうでしょうか？と思って今回の事を決めさせていただきました。この結果は覆りません。少々お休みなってください」

とっさに出た出まかせ。こんなにもすらすらと紡ぎだすことができるとは私自身思いもしませんでした。

「そ、そうなんです。良かったクビというわけではないのですね」「あ、当たり前です！！あなたほどの忠臣を捨てるわけじゃないでしょう！！」

勘違いなさっていますね。これは、私自身勘違いさせるような発言をしたのが悪いのですが……

「わかりました。本日まで働かせていただきます」

その後いつもと変わらない仕事を終えて転移の陣を作り家へと帰還しました。

マリアン又様から出勤停止を命じられてしまいました。

俺に一体何の落ち度があったんでしょうか？

マリアン又様はお休みくださいとは言っていましたが、あの目はそれだけじゃないことを物語っていました。

今日は何も考えないで寝ましょう。

うん、寝てしましましょう。

「お休み」

誰にともなく言って眠りに就くのです。

翌朝起きるとヒルダが共に寝ていました。

何をいつてるの(r y

落ち着きましよう私。そつだ素数を考えれば 1・2・3・4・5・6

しまった素数じゃないこれは整数です!!

え〜とどついうことでしょうか。そ、そう言えば昨日なんだか布団
の中が妙に温かいと思っていましたかまさかあのときすでに!!

「うみゅ〜」

日頃毅然とふるまっているヒルダからは想像つかないこの声、寝顔。

ああ！！かわいすぎます家の妹がこんなにも可愛い！！神様魔界に生をくれてありがとうございます！！！！

思わず抱きしめてしまいますよ！！

ぎゅっ

「うみゆ、おにいさま〜」

だきかえしてくれましたよお！！

鼻に熱が溜まってきたもう、ダメ大好きです！！

「んんう・・・おにいさま・・・？」

目を覚ましてしまったようです。

「ひゃあ！！お兄様！！！！」

あああヒルダが離れてしまいました。もっと抱きしめていたかったんですが。

「おおおおおおはようございます」

同様に顔を真っ赤にしているヒルダも可愛いですね〜

「はい、おはようございます」

心の中ではビーストモードだよお表面上取り繕うのがつらいです、言葉もいつも以上に少なくなってしまうのは御愛嬌ってことでよろしいですか？

「ところで、どうしたんですか？ヒルダが私の家に入ってくるなんて珍しいですが」

「えっと、ですねお兄様に会いに来たというか、あることを伝えに来たというか」

「あること？」

会いに来てくれるなんて最高にうれしいのですが後半の事が気になった。

「はい、あの今日より人間界に行かなくてはならなくなってしまいました。一応その後報告に」

な、なんですって！！会えなくなってしうのですか、いつでも会いたい時に会えてたのに世界を跨ぐとなるとあえなくなってしまいました。

ど、どうしましょう。あっ！！そ、そういえば私は今日から休みだったしついていきましょうか。

「ヒルダ！！私もついていってもいいですか！！」

「は？あの、お兄様マリアンヌ様のところはよろしいのですか？」

「ええ、マリアン又から無期限の出勤停止を命じられました」

「え！？お兄様がですか！！？何かの間違いではございませんか！
！？魔界特務試験で異例の満点を叩き出し、たくさんの貴族悪魔から従者にしたい悪魔No.1を頂いていられるお兄様がですか！！！！
？」

そんなものの統計がとられていたのですかお兄ちゃんビックリです
それよりも凄い勢いでびっくりしましたね。

「ええ、なんででしょうか？」

「でも、そうですか、はい、わかりましたでは行きましょう」

手を差し伸べてくれる妹可愛いですねやっぱり。なぜか凄い笑顔で
す基本的にまじめな顔をしているから気付かないが、笑顔が一番可
愛いですよ。

「はい、よろしくおねがいます」

「アランドロン連れていくのかい？」

「はい私たちも途中まではそうしますが人間界に到着したら、ぼつ
ちやまを残して坊ちやまを捨てる人間を待ちます来たならそやつとも
に生活します」

「了解です、それでは行きましょうか」

そうやって私たちは次元転送悪魔アランドロンの内部に入り込み人
間界へと目指すのでした。

一話（後書き）

次回が未定〜といっても多分主人公設定などが上がると思います。

ではでは〜

一話（前書き）

独自解釈です。

では、一話目です。

一話

侍女のヒルダは、ベル様のために居続けるのが存在意義。

私はヒルダと違って自分の意思でマリアン又様のそばに居続けました。正直初恋だったんです。長い間幼馴染であったから、いつの間にか意識していました、しかし、マリアン又は恋愛関係に疎いのです、未だに恋のこの字も知りません。

だから、私の思いには気づかないのでしょう、そのために今回のようなことになりました。

落ち込んでいたのですが、ヒルダのおかげで何とか、持ち直すことができるようになりました。

ヒルダのことも大好きです。でも、そこに恋愛感情はありません、親愛といえるものです。

まあ、今回はその話は置いておきましょう。

さて、私は現在、川を流れています。知っていますか？次元転送悪魔の中つて4次元空間なんだぜ。

ヒルダに会えてません．．．．．凄く悔しいです!!

でも、流石に人間にベル様を預かってもらわないといけませんから。

よし、そろそろアランドロンから出ますか。

「アランドロン、では、先に出ます。後は頼んみました」

「はい、わかりましたぞ、あとヒルダ様も出しておきます」

光とともに、私たちは外に出ました。

ココが人間界か？なんといいますが、魔界とあんま変わりませんね、多分ここは都心なのでしょう。

「では、ヒルダちょっと世界を回ってきます、じゃあ後のことは任せました」

「え？お兄様はいてくださらないのですか？」

っ！！やめてください！！そんなに上目使いのうるんだ瞳でこっちをみないでください！！

可愛すぎます、ああ、持つてください私の理性！！

脳内で天使と悪魔がささやいてきます

「抱きついてしまいなさい」

「抱きつけよ」

あれどっちも意見同じ？

「「だってお前あなた悪魔だる」()でしょう()?」「」

そうでした！！もう、ゴールしてもいいよね！！

「ヒルダア!!」

「ひゃあ、何ですかお兄様突然!」

「っ!あ、失礼しました、つい」

「あっ……」

「ん?どうしたんだい」

「いえ、何でもありません(もつと抱きつかれていたかったな)」

「????、まあ、いいや、実質離れるわけではありませんから」

「それは、お兄様が最速マツハ10で動けるからでしょうか?」

「違いますよ、今から影をリンクますから、必要があったら呼んでくださいってことです」

「一応私は他者の影にリンクをはれるのです!!最大20人までならいけます。」

現在は、とりあえず、マリアンヌ様と、ヒルダにはっています。

「では、行ってきます、何かあったら教えてくださいよ」

「わかりました、では、行ってらっしゃいませ」

「そう、さびしくしないでください、がんばってください、呼べば

来ますと言ってるのですから」

頭を撫でながら龍召喚を行います。

「出でよ、我が眷属ナル者よ、業火よりも熱き深淵の黒い炎に潜む我が龍よ、我が呼び掛け応じたまえ！！」

漆黒の魔法陣から出てくる漆黒の龍

名を次元龍リゼル

ゲヘナにすむ龍で次元を渡ることができると言われています。

50年ほど前にゲヘナに行ったときに戦闘を行い倒したため眷属にしたのです。

「相変わらず規格外ですね、お兄様の眷属は」

そうなのです、私の眷属は他にも数人います、全員がかなり強いですが、魔界にいる焰王様の直属部隊ベヘモット柱師団の柱爵なら5対1で勝てるほどです。

基準がわからないかもしれませんが、大魔王を20000私を1750とするのでしたら俺の眷属は1000から1250ぐらいです。

お前下剋上できるだろと思うかもしれませんが、2000と1750では世界が違うのだ5違うだけでかなり変わるのです。

仮に下剋上しても、大魔王の片手を飛ばすのが精いっぱいでしょう。

それに、好きな人の親と戦うのは好きではありません。

ヒルダの言葉を最後に私は、リゼルによって飛び去りました

二話（後書き）

かきながら、収集つかなくなっているとおもった。
行き当たりばったりだからひどいなあ〜
すいません、未だに完結が見えてきません。
がんばりますけどね

3話(前書き)

遅くなりましたね。

収集つけられるのか!!?

今回も拙いですすいません。

3話

色々なところを回る前に一度ベル様とヒルダの居る日本を回りましよう。

九州と呼ばれる場所などの西日本と称されているところは大片見終りました。

何といたしますか今のところご飯がおいしいです。別に腹ペコ属性は持っていないのですが。魔界の料理に比べて大変おいしいかったです。

魔力を持っているものがとてつもなく少ないこの世界では科学技術が魔界よりは若干劣ってはいます。

まあ、障壁などはこの世界では不必要なものでしょうが。

現在私は北関東と呼称されている地域に足を踏み入れました……

・足？リゼルに乗っていますのでこの表現はおかしいですね。

ヒルダとの定期報告はかかしておりません。どうやら現在は男鹿辰巳という名前の男を触媒の親としてベル様を任しているようです。

人間にしてはおもしろいと聞きました。私も旅が終わったら会いたいです。

空中を進むこと二時間ほど遠見の魔法を使って地上を見ているのですが、女性一人に男性が群がっていますね。男性として女性に手を挙げるのはダメだと思うのですが。その3km先に女性複数と男性複数がいがみ合っていますね。しかしこちらにも男性の方が多いですね。

加勢しに行きましようか、勸善懲悪ではありませんが、今は亡きお父様の「女性は大切に」の家訓に従いましょう。
リゼルから降りて地上へと参ります。

くっ油断したわ北関東制圧の最後の所で今まで闘ってきた奴らの残党が山ほど集まってきた。寧々や千秋達は別の場所で囲まれて見事に分離されてしまった。私の持っている神月流剣技を用いてもこの人数は難しい。円状に囲まれて円の中心はバットや木刀、鉄パイプを持っていて、後方にはボウガンを持っていたりガス銃といった飛び道具で囲まれている前方を全て蹴散らせても後方の攻撃への対処方法が見当たらない。

「邦枝葵、テメエもこれで終わりだな北関東制圧なんて無理だったんだよ!!!」

下卑た声が周りに響く鬱陶しいことこの上ない。大勢で寄ってたかって随分な態度だ。

「っは！何を言ってるの貴方達は、自分ひとりで女性が倒せないからって群れ作って襲いかかってくる貴方達ほどのゴミもそうそういないわ」

いや、石矢魔には山ほどいたわ、まあ今はどうでもいいわね。

「んだとこのクソアマ!!!この人数差は覆せねえだろうがよ!!!」

「葵ちゃん、倒した後は俺たちといいことしようねえ」

突っ込んでくる男たち逃げ場のないこの状況ではどうしようもない
！！

私は唇を噛みながら次の攻撃に耐えようとしたが、次の攻撃が来る
ことはなかった。

いま、目の前にいる男によって。

「貴方方は、女性に大勢で襲いかかるなんて恥を知らなさい」

ふむ、大して強くないですね寄って集ったところで女性を平気で傷
つけようとするゴミですね。

吐き気がします。気分を害します。虫唾が走ります。殺意が芽生え
ます。苛立ちます。

「っ！！手前何者だ！！」

ゴミの一人がなにか言語を発しています。一応理解はできる言語で
すね。ゴミのくせに言葉が紡ぎ出せるとは驚きですね。

「私ですか？貴方方のような産業廃棄物に仰る必要性は感じえない
ので言いません」

「んだと、おい邦枝の前にこいつを潰してしまえ！！」

あれがリーダーなのでしょいか、どうも統率がとれていないようで

すね。行き当たりばったりで作ったメンバーなのでしょね。皆思いの動きで襲いかかってきました。

「烏合の衆は何匹いようが同じですよ！！」

少しの魔力を込めて腕を横一閃に振り、こちらの女性に当たらないようにゴミを潰していきます。

山のように弓や弾が飛んできましたが、全ての物を手ではじき撃ってきたゴミに返します。

うめき声を挙げながら、何匹ものゴミが倒れていつてます。やれやれあの程度でやられるのは魔界にもそうそういませんよ。

残りは最初に指示を出した男だけになりました。

「ヒッ！！お前、なんだよ！なんなんだよお！！！！」

尻もちを付き一歩ずつ後退をしています。

このゴミの前に顔を近づけ目を合わせて幻術を見せます。そして、いま周りで倒れ伏しているゴミ共にも同様のことをしていきます。

「うわあ！！体から虫が這いずってくる！！」

「ぎゃああ！！腹を食い破って蛆が、蛆があ！！！！」

私が今かけたのは相手に幻覚を見せる魔術です。どのような幻覚を見せるのかは私が決められるので現在はゴミたちに相応しいように体中に虫が蠢いています。脳が死を実感したら死んでしまうので、

ある一定ラインを越えたら気絶するように調整しています。

全てのゴミが泡を吹きながら気絶したところで終わりました。

「大丈夫ですか、綺麗なお嬢さん？」

圧倒的だった現在目の前の光景はそうとしか形容できなかった。

腕を振るっと思ったたら前方の敵が全てはじけ飛んだ。お爺ちゃんほどではないけれど明らかに私よりも強い。

相手も応戦しようと銃撃などを敢行したけれど、全てが跳ね返されて全滅していった。

そして彼が近づいたと思ったたら全員が呻きはじめ今では全員気を失っている。

私の方にゆっくりと近づいてきた。

「大丈夫ですか、綺麗なお嬢さん」

「へっ？」

若干上ずった声が出てしまった。何？私に言っているの？

「ななな何を言ってるのよ！！はっ？私が綺麗？バカなこと言ってるんじゃないわよ！ー！ー！」

顔が紅いのがわかってしまう。何よこいつさっきまで恐ろしい顔していたのに今のこの表情!!

綺麗な顔立ちしていて髪も綺麗、鼻が高くって!!何を考えているの!私は!!

「いや、純粹に綺麗だと思っただけですよ。今はかわいらしいですが。ところで大丈夫ですか?」

「あ、あなたのおかげで大丈夫よ。あ、ありがとう」

「そうですか、それは良かったです」

「っ!!」

微笑んでいる顔が!!!無理無理綺麗すぎる何この人!!!こんな人がこの世にいたの!!!?

「っ!!あ!!寧々達が!!」

忘れていた今はあの子たちは別の場所で闘っているどうにかしないと!!

「どうしましたか?」

「いえ、私の仲間が別の場所で闘っているんです。どうにかしないと!!」

「向こうの人ばかりですね、では、少し行ってきますよ」

「えっと、迷惑じゃなかったらお願いします」

「安心してください。すぐに帰ってきますよ」

そう言いながら彼はこの場から信じられないスピードで走って行った。って！！早すぎでしょなにあの速度！！バイクよりも速いじゃない！！

あっ！名前を聞き忘れた。

葵姐さんと分離されてしまったって数時間私たちの方が優勢ではあるのだが数の暴力によって少しずつ劣勢を強いられていった。

「ぐっ！！寧々さん！！きついです！！そろそろ前線が潰されます！！」

くそっ！！でも勝ってみせる！！葵姐さんは別の場所で闘っているんだ！！

千秋も特攻しているから行くよ！！

「おっと、少々お待ちください」

目の前に突然男がやってきた。こいつも敵か？

「何者だい？あんた？」

「とある方にこの女性方を助けるように頼まれたのですよ、何者かは秘密ですね」

そう言い終わるとその男は単身突っ込んだ

「……………はあ!!? ちょいつ突っ込んだと思ったら敵がどんどん吹き飛んでいつてる!

あっという間に全員蹴散らしてしまったよ。

「終わりましたよ」

「あ、ああ、ありがとうな」

「いえいえ、おっと大丈夫ですか? お嬢さん?」

肩に背負っていたのは千秋だった。

「は、はい、ありがとうございました」

ん?なんか心なしか顔が赤くなっていないかい?

「大丈夫だった? 皆?」

「葵姐さん!! 大丈夫だったんですか!?!」

「ええ、その人が守ってくれたわ」

こいつが!?!でも、確かにこの実力なら領ける。

「ところで名前を聞き忘れていたわ名前は？」

「私の名前はアザキエルと申します」

「外国の人なんですか？」

「はい、まあそんな感じですよ」

「まあ、みなさん無事で何よりですよ」

「全員ではないんですけどね……」

「寧々さ〜ん葵姐さ〜ん」

「大丈夫だったのあんた達！！」

「はい、なんかよくわからないんですけど緑色の光が見えたんですけど終わったら体が綺麗になっていました」

「は？緑色の光で綺麗になった？なにそれ魔法？」

「では、また会えたらいいですね。では」

「待つて！！お礼がしたいからこのままついてきてくれるかしら？」

「葵姐さんは仁義に篤いからなんとなくわかります。」

「はい、よろしいですが名前を聞いてもよろしいですか？」

「あっと、忘れていたわね私の名前は邦枝葵です」

「そうですか、葵さん。今後ともよろしくお願いします」

なんだかんだでどうこうするようになったな。

ところで千秋はどうしてこいつの背中にしがみついて離れないんだ
らうか？

「千秋はどうしてアザキエルさんの背中に張り付いているのかしら
？」

葵姐さん妙に苛立っていませんか？あっ！青筋立ってますし。

「かつこいい」

千秋、うちの理念覚えてるよね！！？葵姐さんも震えないでくだ
さいー！！

ああ、何だろっ妙に不安になってきた！！！

3話（後書き）

次の投稿も未定です

アザキエルは怒ると性格がほんの少し変わります。

といってもめったなことでは怒らないのですが・・・

四話（前書き）

不定期上等とは申しましたが、実際かなり遅れてしまいました。すいません。難産に次ぐ難産。

もうひとつも書いておりますが、タイピングができません。

では、これからどうなっていくかわからない作品ですがよろしくお願ひします。

四話

邦枝さん達に連れられて今現在邦枝さんの家に来ています。しかし、邦枝ですか・・・どこかで聞いたことがあるんですね。確かベヘモット殿のお話の時に・・・。

なんにかのどに骨が引っ掛かっている奇妙な感じなので思い出そうとしていると葵さんが話をかけてきました。

「あの、アザキエルさん。なんだか、探しているって人が来ているんですけど?」

「はい、そうですね。ありがとうございます。葵さん、ところで誰ですか?」

私を探しに来る人ですか?誰か居ましたっけ?そんな人はいないはずなんです。

「えっとたしか・・・」

ズンズンという音が形容できそうな声で歩いてきた存在が襖を盛大に開けてきました。

「主よ!!突然飛び降りないでくれ!!心配するじゃろう!!」

そこには、黒髪で黒いつり目、黒衣をまとった女性が立っていました。

「ああ、リゼルでしたか、すみません。ちょっとあったもので」

「だったら。言ってくれ！！儂の気持ちを知ってほしいのじゃ！！」

「えっと、アザキエルさん。この人は？」

「ああ、すみません葵さん。こちらは私の「従者のリゼルじゃ」・・・です」

憤慨しつつも顔には心配の顔をしていたリゼルが胸を張って従者であることを宣言してきました。

リゼルは竜でありながらもゲヘナに長らく住んでいた神話クラスの存在なのか人化？悪魔化？まあ、人型になることが可能です。

戦闘力は多少落ちますが、この世界では負けることは無いと言えます。

「従者！！？えっと、アザキエルさんはかなりのお金持ちなんですよっか？」

「いえ、そうではないんですが色々と事情があるのですよ」

「むっ、主よところでこの者たちは何者なのじゃ？」

若干ジト目になって私を睨んでいます。いったいなんでしょうか？

「ええ、先ほど降りた際に助けた人たちです」

「はい、えっと、邦枝葵です」

「大森寧々です」

「谷村千秋」

「ほう、また主は……まあ良い。ところでじゃ……」

目じりをびくびくと動かしながらズビシツという音が鳴りそうなほどの勢いで千秋さんを指さしました。

「なぜに、貴様は主の膝にのっぺおるんじゃああ……」

そう言えば忘れていましたね。現在千秋さんが私の膝で心地よさそうに座っているんですよ。先ほどまで葵さんが口論していたのですが、千秋さんは基本的に口数が少ないようで、途中から諦めています。

「落ち着く」

単調ながらしっかりと聞こえる声で言ってきました。

「僕は長いこと主と一緒に追ったが、そんなことさせてもらったこととはないのじゃ……」

「落ち着いてください、リゼル。私も今後できる限りお願いに答えますのでまんしてください」

頭を撫でながらリゼルに言い聞かせます。

するとリゼルの顔は見る見るうちに真っ赤に染まっていきます。

「や、やめんか、主い・・・ふわあ」

くくてとゆでダコのようになってしまうたりゼルが座り込んでしまいました。

「うらやましい・・・」

「葵姐さん？いま何か言いましたか？」

「え！？な、何でもないわよ！？」

頭から手を離すとリゼルがかなしそうな表情をしてきました。また今度にもしてあげましょう。

顔の下からなんだかじっとりとした視線を感じ振り返ってみると千秋さんが頭をこちらに向けてきました。

これは、やった方がいいのでしょうか？

「うにゅ、ふわあ」

頭を撫で始めていると千秋さんが放蕩とした顔をし始めてきました。

悩ましそうな声を定期的に上げるのはどうなのでしょう。というよりなぜかはわからないのですが私が頭を撫でると女性は何故か悩ましい声を挙げてしまうのですが、どうしてなのでしょう？

むかし、ヒルダにやった時に

「お兄様は撫でる際に適度な力加減でつばを刺激しているので一度触られると天にも昇る気持ちと激しい中毒性に襲われてしまうのです」

と言われましたね。私個人としては何もしていないつもりなのですが。

「今、かえったぞ!!」

「あ、おじいちゃんが帰ってきた、ちょっと待ってください」

祖父ですか・・・ん？邦枝のご老人・・・ベヘモット・・・あれ？なにか繋がりそうですね・・・

あ！！思い出しました。昔ベヘモット殿が仰っていました。確か名前は邦枝一刀齋^{いっとうさい}。人間にしてかなりの強さだと聞き及んでいます。どのような人なんでしょうか？筋骨隆々とした男なんでしょうか？それとも某地上最強の親父と闘うマンガの渋川さんみたいな人なのでしょうか？え？なんでその漫画知ってたよ？実はですね魔界にも人間界のマンガは流れてきているのですよ。

ちなみにあのマンガに出てくる技の大半ならできますよちなみに腕を光速で動かしてもソニックブームの反動程度で私は傷つくことなんてありえないのですがね。

「む？なんじゃ？いつもとは見慣れない靴が・・・」

「お、お爺ちゃん!!」「これは・・・」

「ん？その反応は、いつもの奴らではないのじゃな。まさか、男か

「……！」

「ギクツッ……！」

「凶星じゃな……！何者じゃ……！」

凄く早い足音が聞こえてきます。それでも、なかなか足音は静かなものですね。一刀斎殿ではなくとも武道家あることは間違いないでしょう。襖を凄まじい音を出して開き一人のお爺さんが出てきました。見た目は筋骨隆々ではなく、細身のお爺さんですね。

「おぬしは……む？もしか……！」

お爺さんがこちらを見ながら目を細めてきました。

これは、ひょっとすると私が何者かばれていますかね……ベヘモツト殿と闘っているだけであつたので悪魔がどういう存在か分かっているのでしょう。

「おぬし、ちょっとこっちに来い」

一度は閉めたはずの襖を再度開き、お爺さんともに出て閉めなおしたところで私の首筋にお爺さんが真剣を突き付けてきました。

四話（後書き）

どうでしょうか、次は未定なんで書くことができるかというと思います。

小説書こうと思うと、ついネットにつなげて小説読んだり動画みたり、えろg・・・げふんげふん。

エロい妄想すると右手がスライド・・・もう黙ります。すいません。ちよ、石投げないでください。本当に申し訳ございません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5039v/>

ベルゼばぶ ~ 侍女の兄 ~

2011年10月6日00時22分発行